

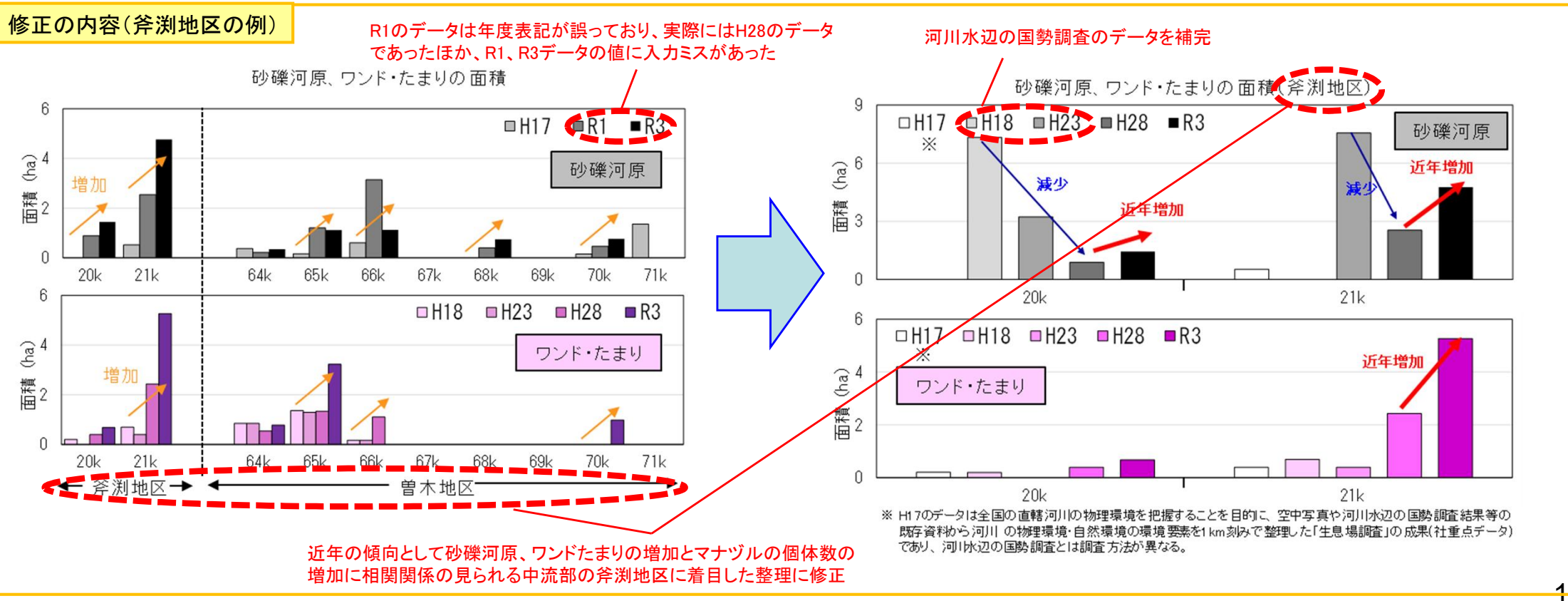
川内川水系河川整備基本方針の変更について

- ・ 前回（第163回）審議資料の修正箇所一覧

令和8年7月27日

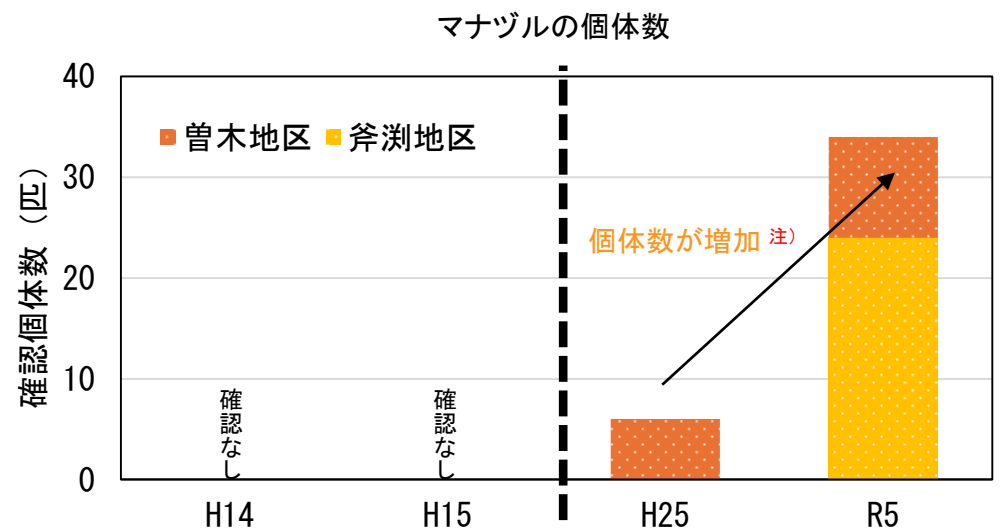
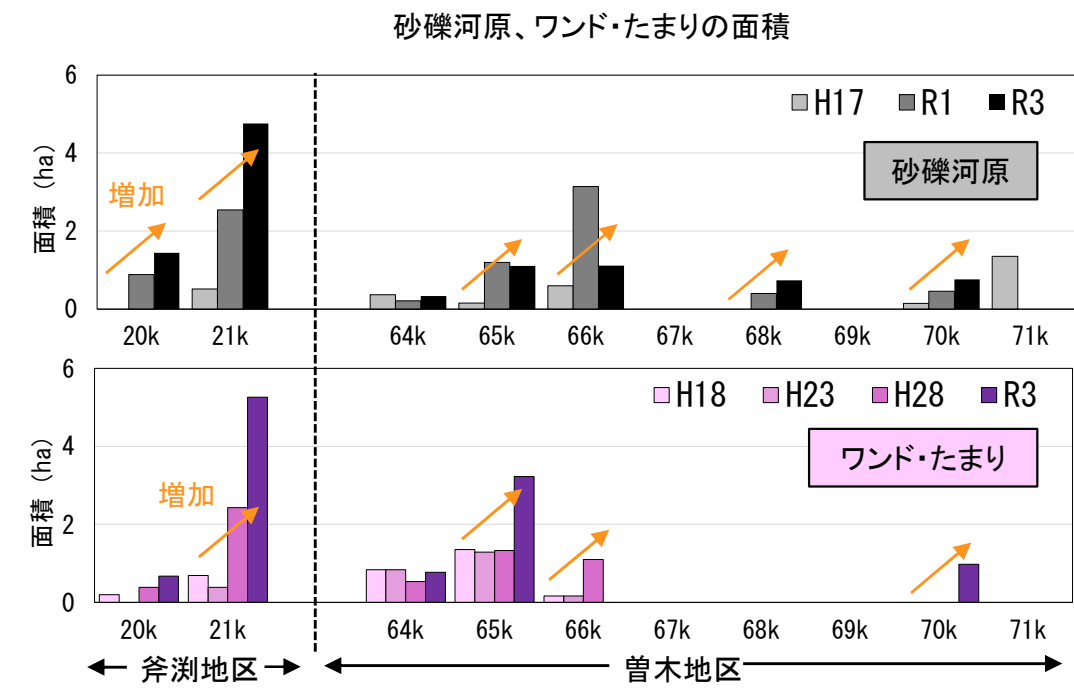
国土交通省 水管理・国土保全局

- 【誤りの内容】
- 砂礫河原の面積に関するグラフについて、分析に用いたデータは必ずしも全ての河川水辺の国勢調査のデータを使用していなかったことに加え、データの入力ミス等による年度表記と値の誤りがあった。
- 【誤りの範囲】
- 資料2-1、2-2⑤河川環境・河川利用についての検討で示した生物の個体数及び生息場の変遷
(第163回小委員会_資料2-1_川内川水系河川整備基本方針の変更について_P49)
(第163回小委員会_資料2-2_参考資料_川内川水系河川整備基本方針の変更について_P13、14、17)
- 【修正の内容】
- 砂礫河原の面積、淵の面積、数、河道内樹林の面積のグラフについて、河川水辺の国勢調査のデータを補完するとともに、入力や集計方法に誤りのあったグラフを修正。(資料2-1_P49、資料2-2_P13、14、17)
 - 砂礫河原、ワンド・たまりの面積とマナヅルの個体数の関係整理において、近年の傾向として砂礫河原、ワンド・たまりの増加とマナヅルの個体数の増加に相関関係の見られる中流部の斧淵地区に着目した整理に修正。(資料2-1_P49)
 - イカルチドリとミサゴの個体数のグラフについて、H14とH15のデータは複数年にわたる一連の調査であるため、合算して表示。(資料2-2_P13、P17)



- 中・上流部では砂礫河原、ワンド・たまりが広く分布しており、近年にかけて増加している。
- 砂礫河原、ワンド・たまりを代表する重要種として、マナヅルについて個体数の経年変化を確認した結果、近年確認個体数が増加している。^{注)}

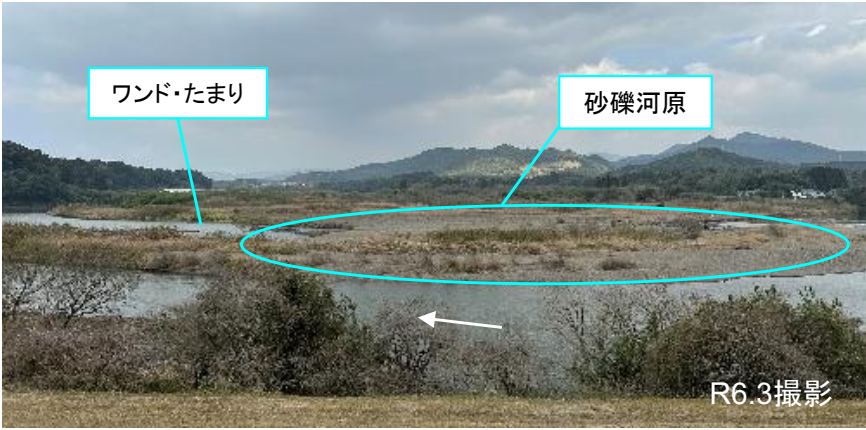
川内川中・上流部に生息する重要種と砂礫河原、ワンド・たまりの経年変化



※調査面積約10haの範囲内の砂礫河原、ワンド・たまりを調査した結果
(越冬期で確認)
※ H14-H15とH25-R5では調査方法が異なるため、個体数の単純比較を行わない

【調査方法】
・鳥類調査は繁殖期、渡り期、越冬期で実施
・調査範囲内の砂礫河原、ワンド・たまりで、ラインセンサス法(H14-H15)・スポットセンサス法(H25-R5)により網羅的に調査した種を記録

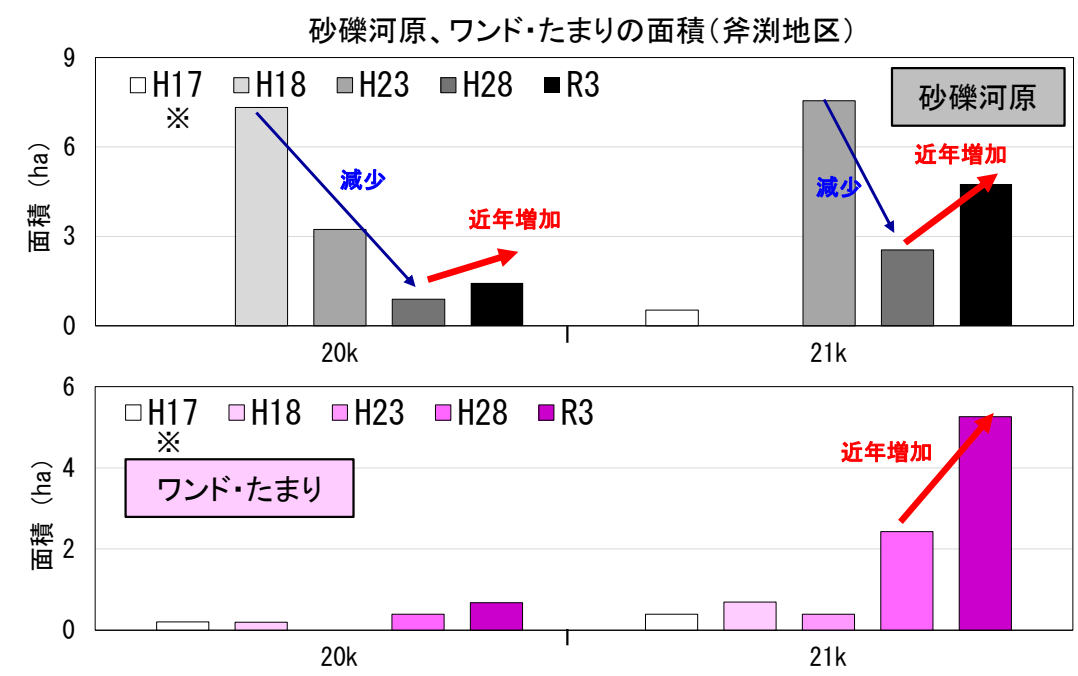
砂礫河原、ワンド・たまり環境 【斧淵地区】



※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年4～5巡分(15～20年)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(中流部【斧淵地区】:20.0～22.0k、上流部【曽木地区】: 64.0～72.0k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

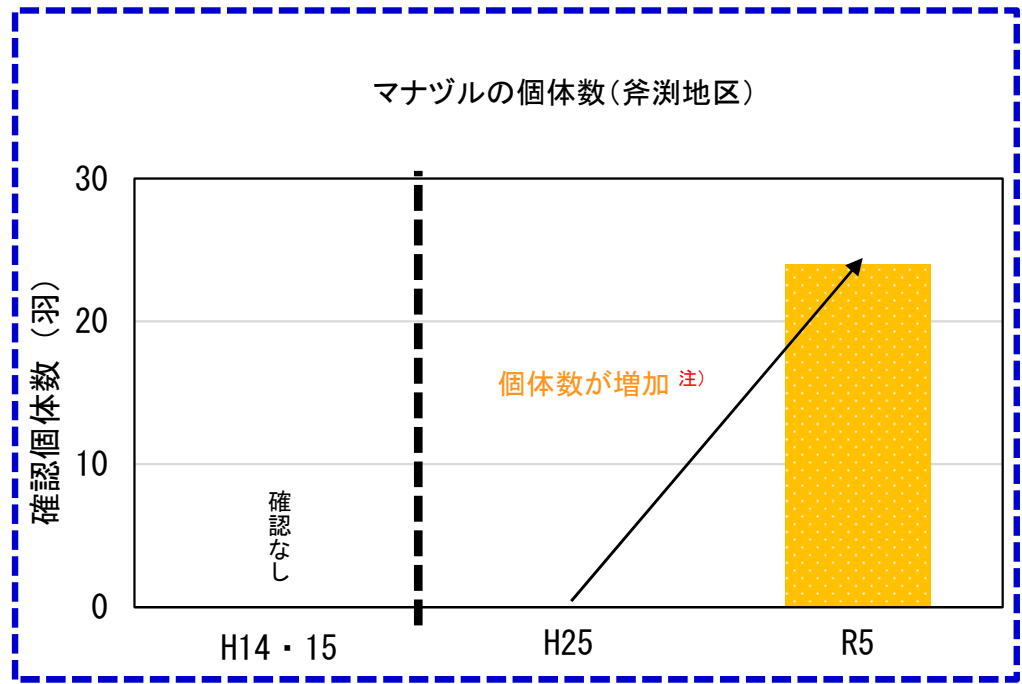
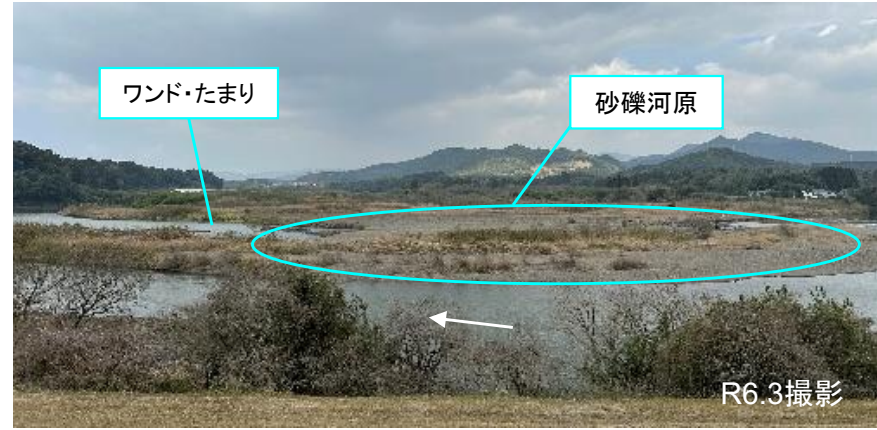
- 中流部では砂礫河原、ワンド・たまりが広く分布しており、斧淵地区(20.0～22.0k)では近年増加している。
- 砂礫河原、ワンド・たまりを代表する重要種として、マナヅルについて個体数の経年変化を確認した結果、斧淵地区で近年確認個体数が増加している。^{注)}

斧淵地区に生息する重要種と砂礫河原、ワンド・たまりの経年変化



※ H17のデータは全国の直轄河川の物理環境を把握することを目的に、空中写真や河川水辺の国勢調査結果等の既存資料から河川の物理環境・自然環境の環境要素を1km刻みで整理した「生息場調査」の成果(社重点データ)であり、河川水辺の国勢調査とは調査方法が異なる。

砂礫河原、ワンド・たまり環境【斧淵地区】



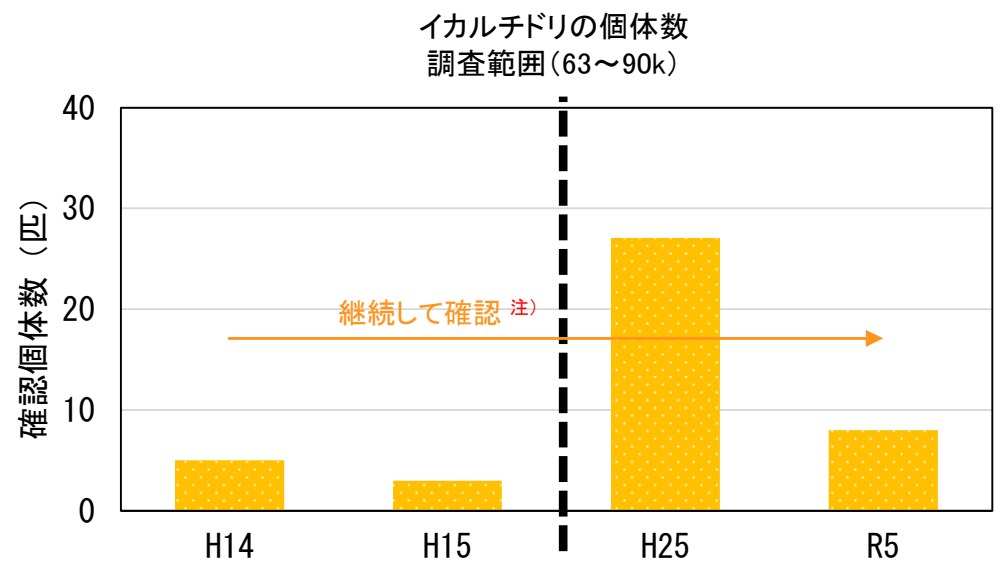
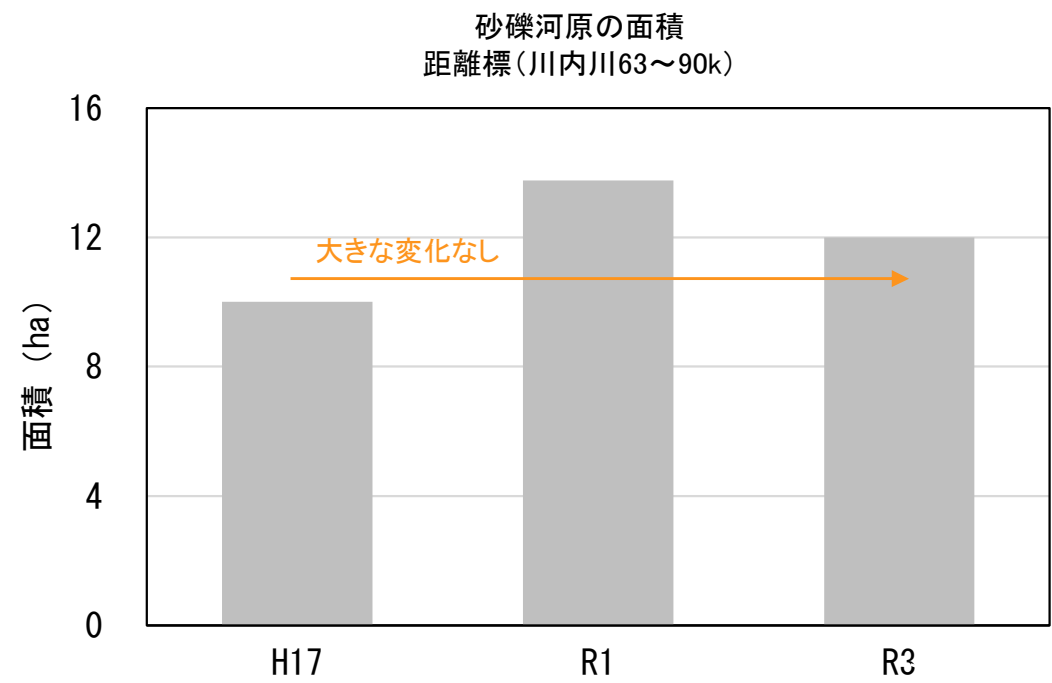
※調査面積約2haの範囲内の砂礫河原、ワンド・たまりを調査した結果(越冬期で確認)
※H14・15とH25-R5では調査方法が異なるため、個体数の単純比較を行わない

【調査方法】
・鳥類調査は繁殖期、渡り期、越冬期で実施
・調査範囲内の砂礫河原、ワンド・たまりで、ラインセンサス法(H14・15)・スポットセンサス法(H25-R5)により網羅的に調査した種を記録

※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年3～4巡分(20年程度)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(中流部【斧淵地区】: 20.0～22.0k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※地区範囲は、河川水辺の国勢調査でマナヅルが確認された範囲としている
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

- 上流部(鶴田ダム上流)では砂礫河原が広く分布しており、大きな変化は見られない。
- 砂礫河原を代表する重要種として、イカルチドリについて個体数の経年変化を確認した結果、変動はあるものの継続して確認されている。^{注)}

川内川上流部(鶴田ダム上流)に生息する重要種と砂礫河原(自然裸地)の経年変化



※調査面積約15haの範囲内の砂礫河原(自然裸地)を調査した結果
(繁殖期、渡り期、越冬期すべてで確認)
※ H14~H15とH25~R5では調査方法が異なるため、個体数の単純比較を行わない

- 【調査方法】
- ・鳥類調査は繁殖期、渡り期、越冬期で実施
 - ・調査範囲内の砂礫河原(自然裸地)で、ラインセンサス法(H14~H15)・スポットセンサス法(H25~R5)により網羅的に調査した種を記録

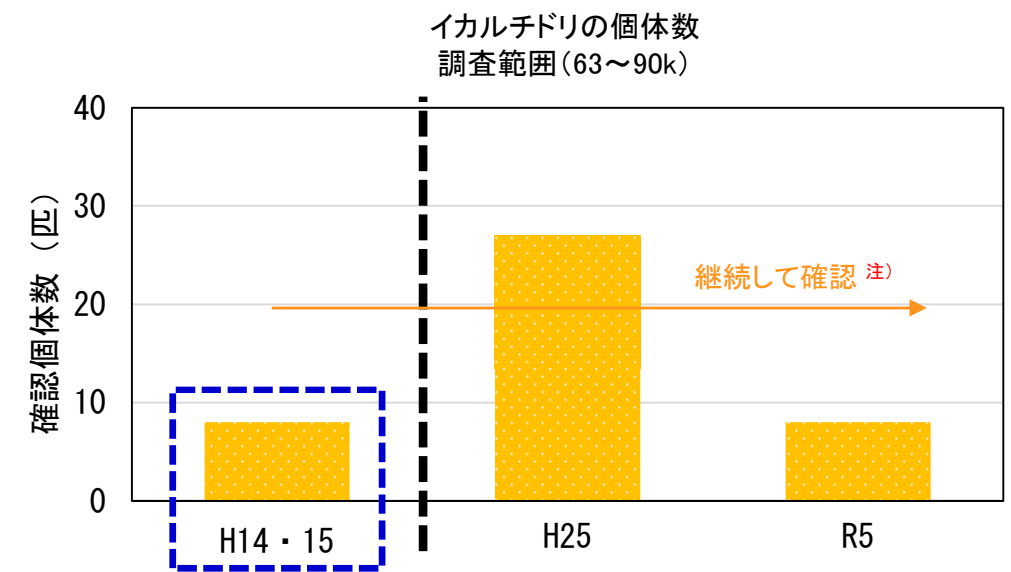
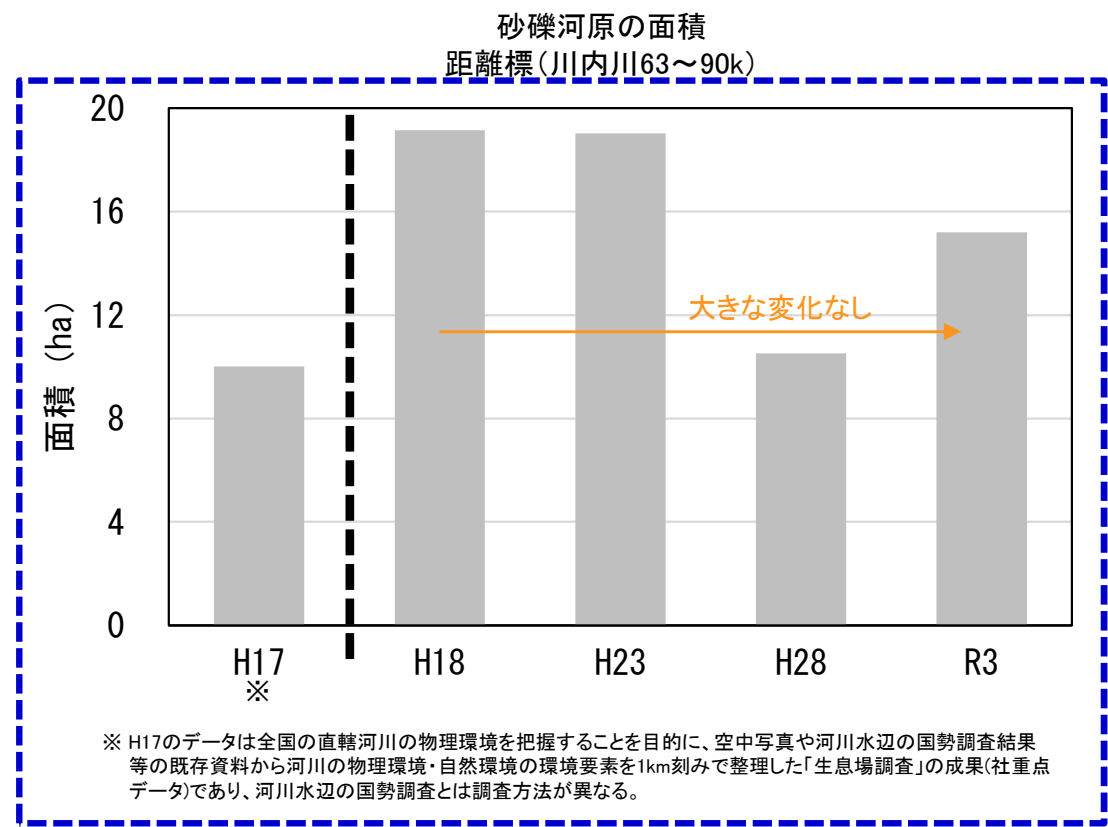
上流部(鶴田ダム上流): 63~90kの砂礫河原環境(川内川69.8~70.2k付近)



※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年4~5巡分(15~20年)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(上流部(鶴田ダム上流): 63~90k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

- 上流部(鶴田ダム上流)では砂礫河原が広く分布しており、大きな変化は見られない。
- 砂礫河原を代表する重要種として、イカルチドリについて個体数の経年変化を確認した結果、変動はあるものの継続して確認されている。^{注)}
- 修正箇所

川内川上流部(鶴田ダム上流)に生息する重要種と砂礫河原(自然裸地)の経年変化



※調査面積約15haの範囲内の砂礫河原(自然裸地)を調査した結果(繁殖期、渡り期、越冬期すべてで確認)
※H14・15とH25~R5では調査方法が異なるため、個体数の単純比較を行わない

【調査方法】
・鳥類調査は繁殖期、渡り期、越冬期で実施
・調査範囲内の砂礫河原(自然裸地)で、ラインセンサス法(H14・15)・スポットセンサス法(H25~R5)により網羅的に調査した種を記録

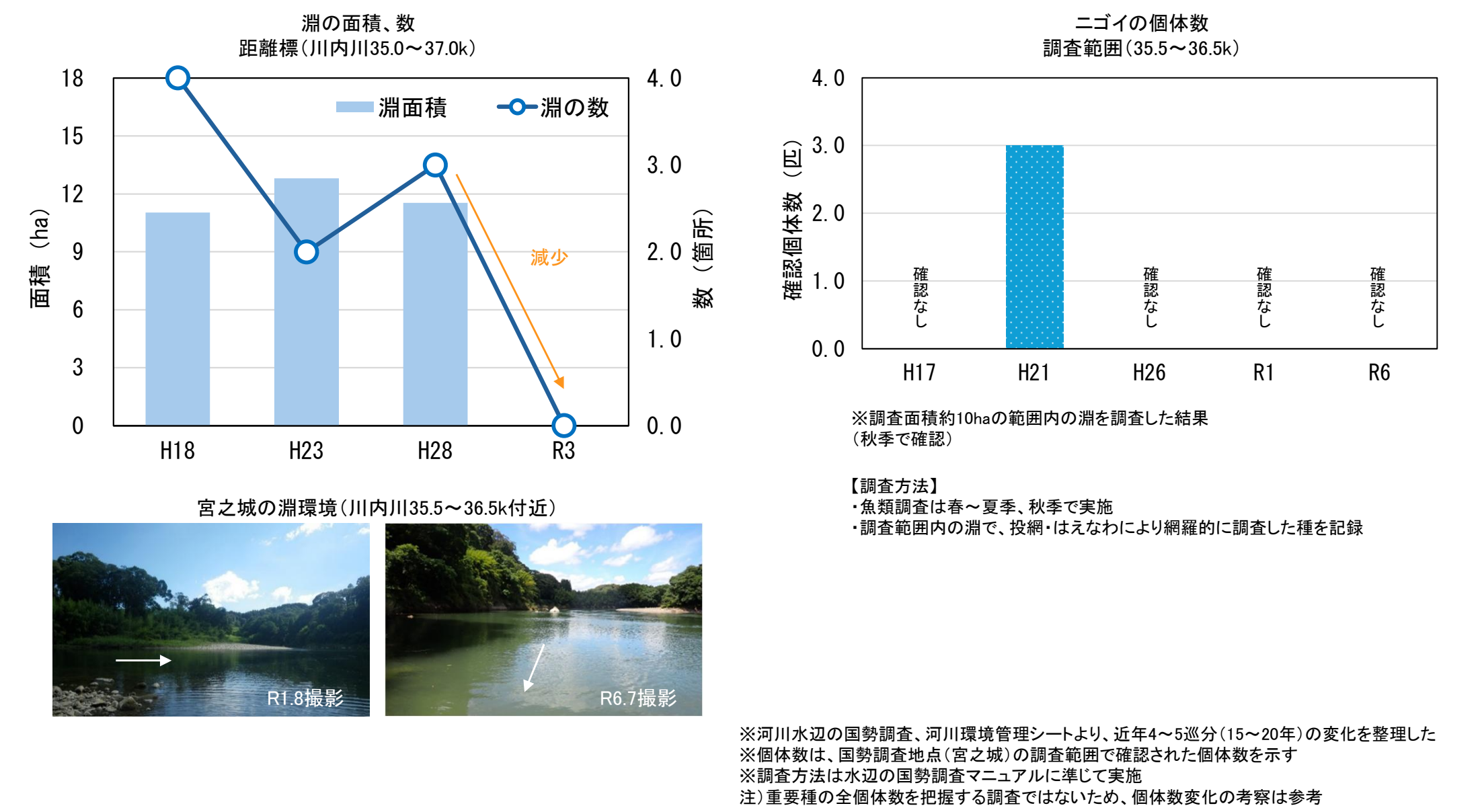
上流部(鶴田ダム上流): 63~90kの砂礫河原環境(川内川69.8~70.2k付近)



※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年3~4巡分(20年程度)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(上流部(鶴田ダム上流): 63~90k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

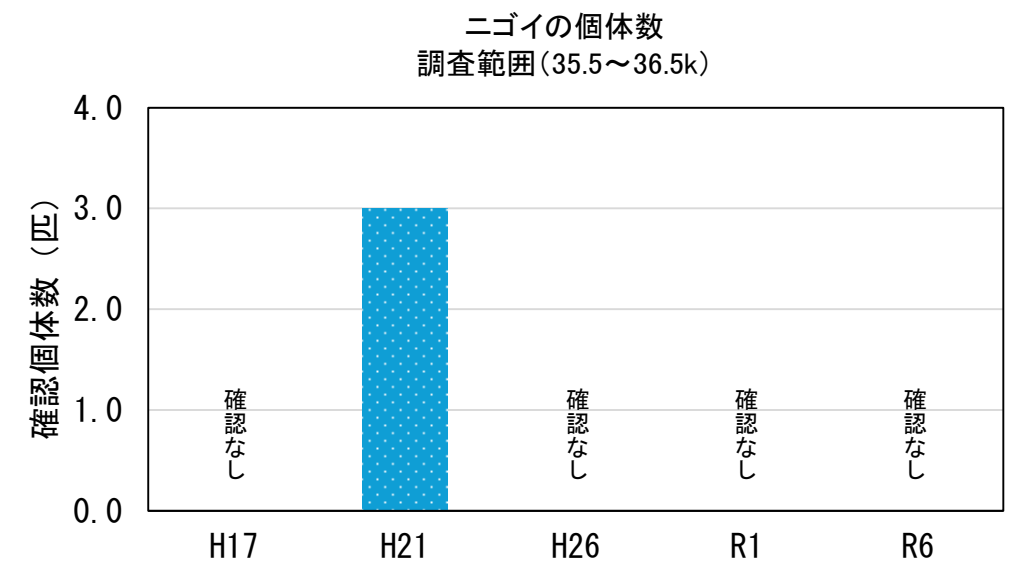
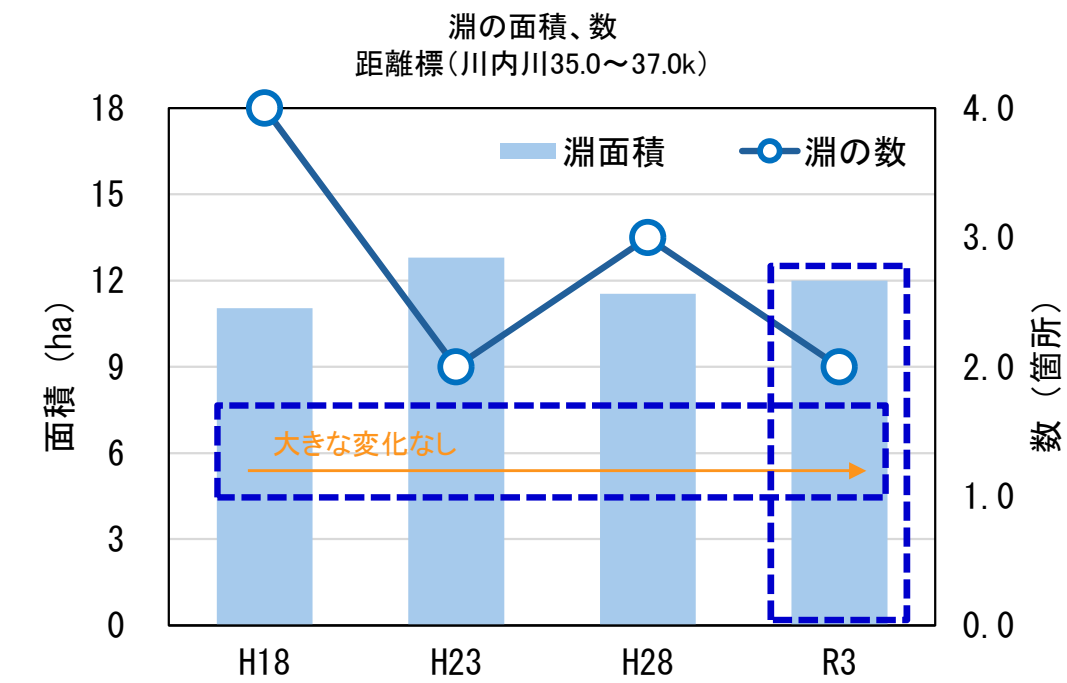
- 中流部では瀬と淵が連続して分布しており、35.0～37.0k区間では近年減少している。
- 淵を代表する重要種として、ニゴイについて個体数の経年変化を確認した結果、平成21年でのみ確認された個体数は3匹と少なかった。^{注)}

川内川中流部に生息する重要種と淵の経年変化



- 中流部では瀬と淵が連続して分布しており、大きな変化は見られない。
- 淵を代表する重要種として、ニゴイについて個体数の経年変化を確認した結果、平成21年でのみ確認された個体数は3匹と少なかった。注)

川内川中流部に生息する重要種と淵の経年変化



※調査面積約10haの範囲内の淵を調査した結果
(秋季で確認)

- 【調査方法】
- ・魚類調査は春～夏季、秋季で実施
 - ・調査範囲内の淵で、投網・はえなわにより網羅的に調査した種を記録

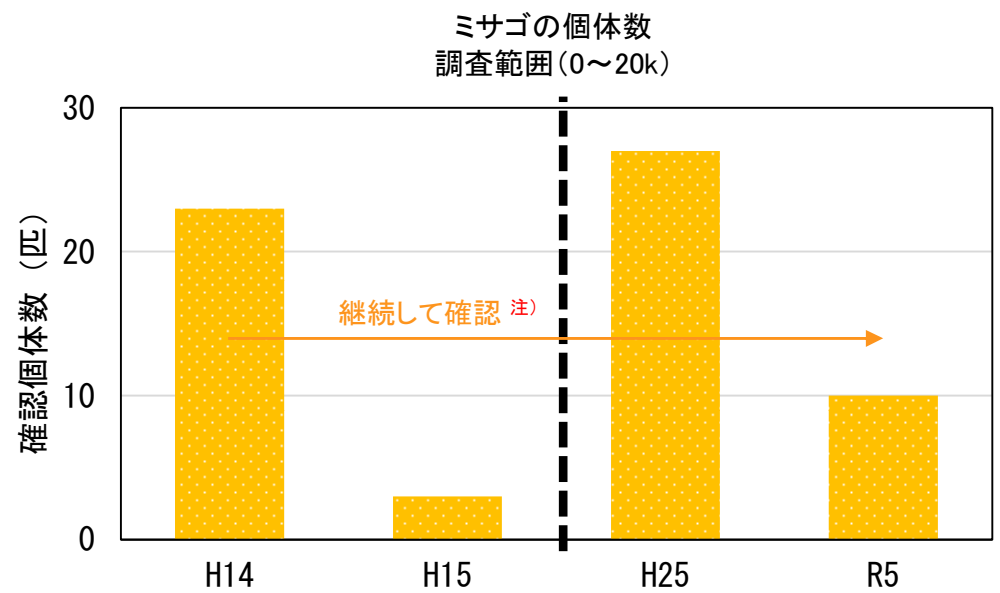
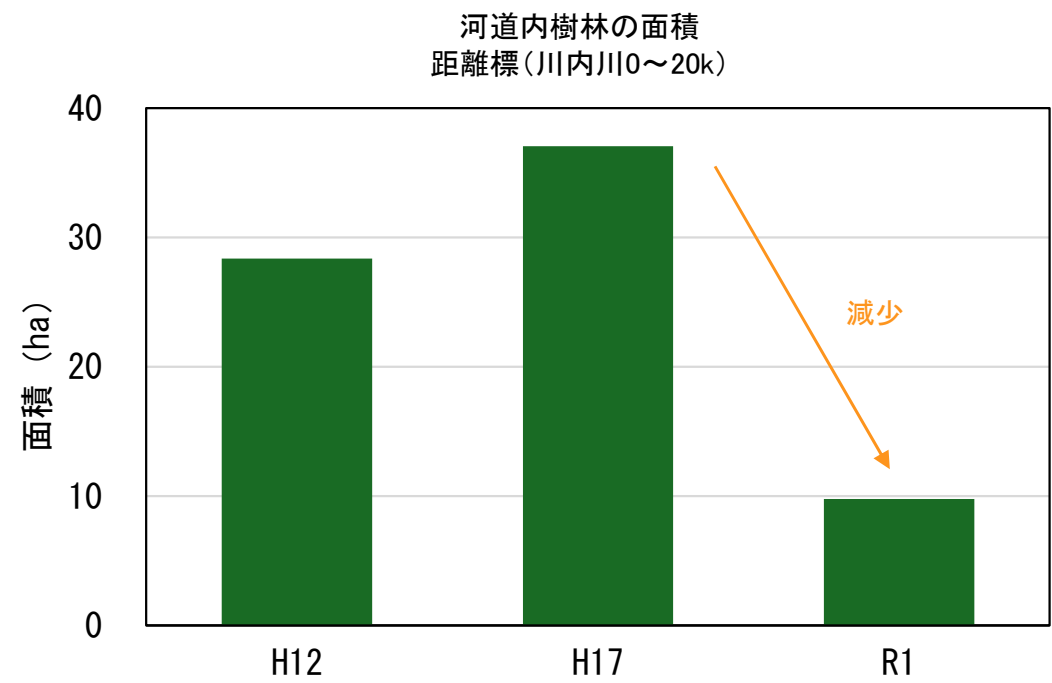
宮之城の淵環境(川内川35.5~36.5k付近)



※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年4~5巡分(15~20年)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(宮之城)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

- 下流部のうち、1.0～9.0k及び13.0～20.0k区間に河道内樹林が広く分布しており、距離標によって増減が見られ、近年は減少している。
- 河道内樹林を代表する重要種として、ミサゴについて個体数の経年変化を確認した結果、変動はあるものの継続して確認されている。^{注)}

川内川下流部(感潮区間)に生息する重要種と河道内樹林の経年変化



※調査面積約30haの範囲内の河道内樹林周辺を調査した結果
(渡り期、越冬期、越冬期すべてで確認)
※ H14～H15とH25～R5では調査方法が異なるため、個体数の単純比較を行わない

- 【調査方法】
- ・鳥類調査は繁殖期、渡り期、越冬期で実施
 - ・調査範囲内の河道内樹林周辺で、ラインセンサス法(H14～H15)・スポットセンサス法(H25～R5)により網羅的に調査した種を記録

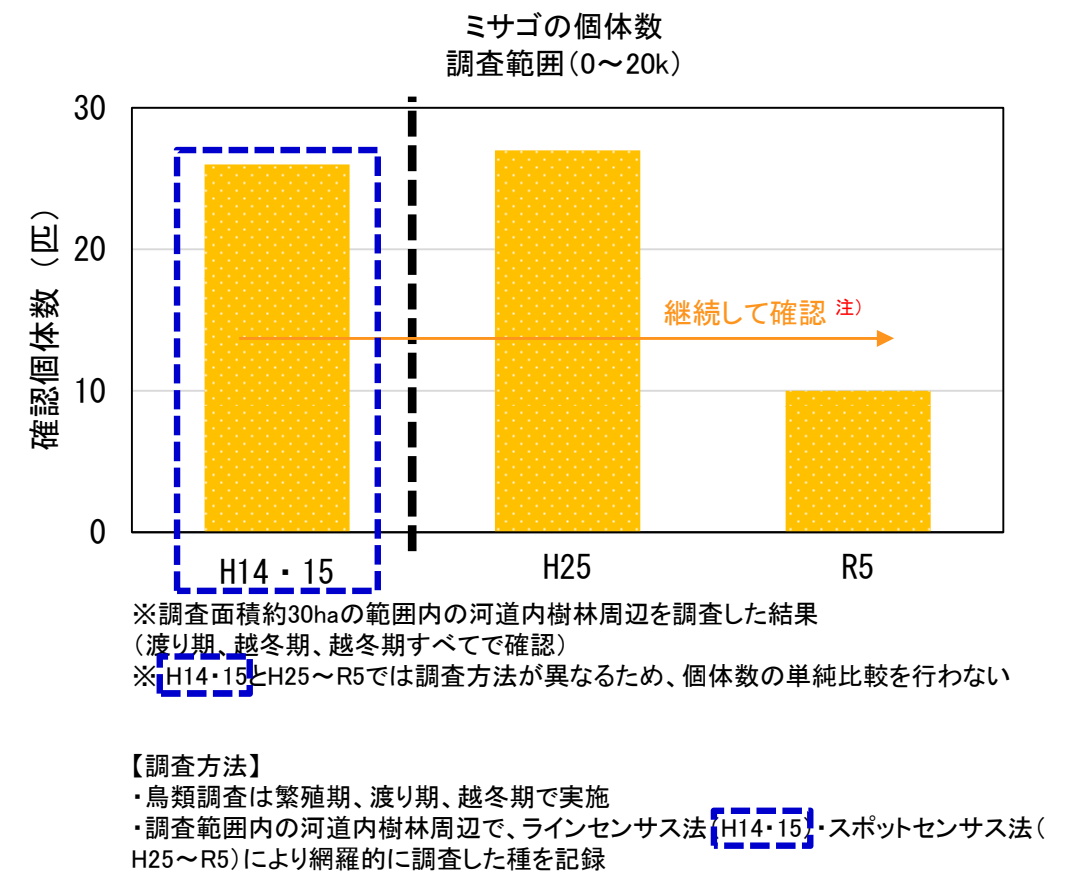
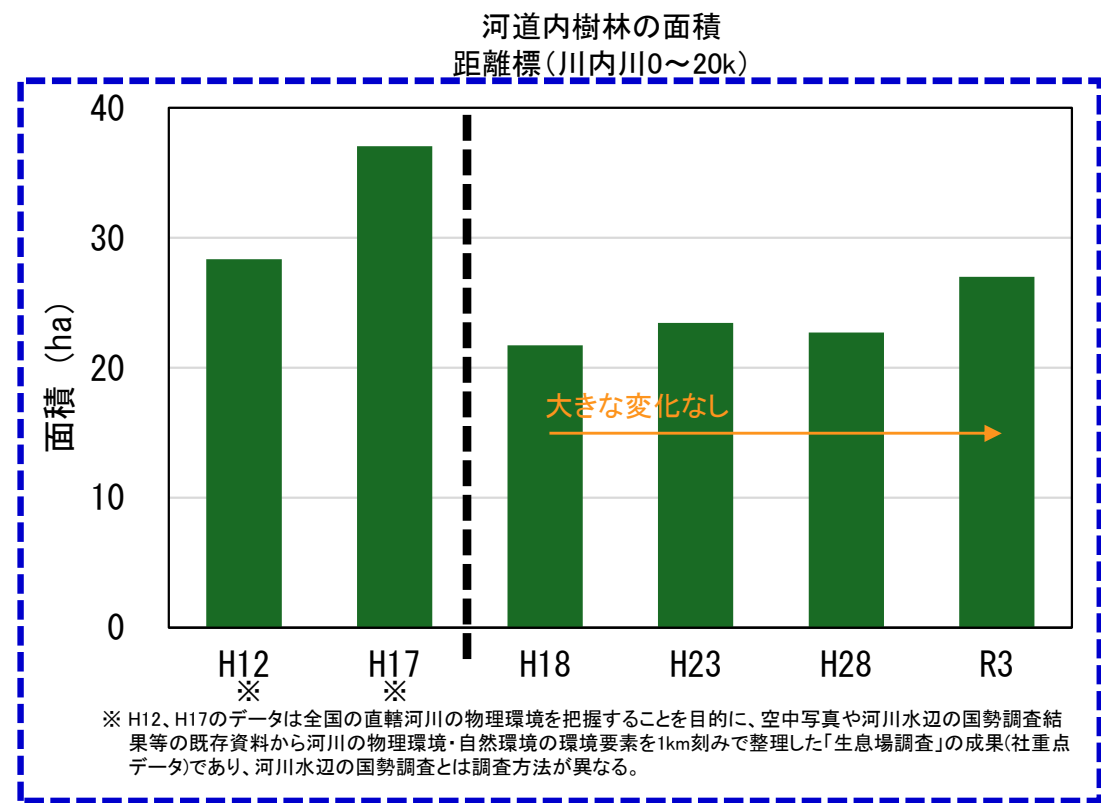


※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより、近年4～5巡分(15～20年)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(下流部:0～20k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考

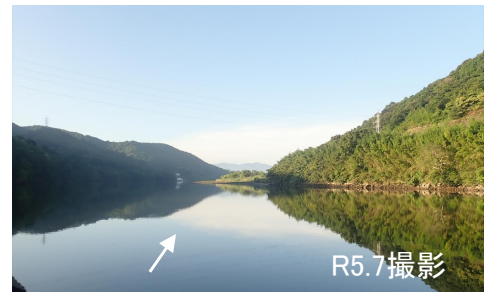
- 下流部のうち、1.0～9.0k及び13.0～20.0k区間に河道内樹林が広く分布しており、大きな変化は見られない。
- 河道内樹林を代表する重要種として、ミサゴについて個体数の経年変化を確認した結果、変動はあるものの継続して確認されている。^{注)}

修正箇所

川内川下流部(感潮区間)に生息する重要種と河道内樹林の経年変化



下流部:0～20kの河道内樹林環境(川内川16.0～16.4k付近)



※河川水辺の国勢調査、河川環境管理シートより近年3～4巡分(20年程度)の変化を整理した
※個体数は、国勢調査地点(下流部:0～20k)の調査範囲で確認された個体数を示す
※調査方法は水辺の国勢調査マニュアルに準じて実施
注)重要種の全個体数を把握する調査ではないため、個体数変化の考察は参考